

周南は長門・周防歴史の十字路

会員 山 神 利 勝

はじめにかえて

「周南は長門・周防歴史の十字路」と題し、本稿を掲載（徳山地方郷土史研究会・第42号）いただいた。

古墳時代には、久米地区と花岡上地地区は一つの集落だった。時代は降つて、戦国時代末期、中国八ヶ国の覇者・毛利氏は、長門・周防二州に押し込まれ、今日の行政区分では、徳山市（現周南市）と下松市に割かれた……。こと然様に、長門・周防の歴史を辿ると、周南市史と下松市史のとおり、往古から近代にかけて、長門・周防の歴史の舞台となったことが、浮かびあがって来る。

第一章 律令国家と周防の交通

『道路の日本史』によると、道路を歴史の流れで見ると、「紀元前後数世紀に於ける世界で、一つはイタリア半島の一角、いま一つは中国・山西山脈の屈曲部あたり的心中部から樹状に延びる道路交通網が、お互いに何の関連もなく広がった……。一つには、すべての道はローマに通ずのローマ街道であり、今一つは、長安にあつて中国全土を支配するため、秦の始皇帝専用の軍用道路がそれである。

『下松市史』によると、律令国家は、平城京や平安京

を起点とする放射線状の七道、山陽大路、東海中路・東
山中路、北陸小路・山陰小路・南海小路・西海小路があ
り、唯一の大路である山陽道は、都京と朝鮮・中国との
国際交通の要衝、しかも西辺防備の拠点となった筑紫の
太宰府とをつなぐ外交・軍事の主要ルートでもあり、先
進的な外国文化流入の要路となった。なお、山陽大路と
あるが、実際には中路と同じ道幅しかなかった。これは、
半島や大陸からの要人は、海路で来て、そのまま海路で
大坂（現兵庫）の港に上陸して陸路を大坂、あるいは奈
良へ向かった事の証左ではないかとも考えられる。

再び、『下松市史』によると、内海ルートの笠戸泊や『海
瀬舟行図』・他によると、山陽道上の生野屋駅家が、官
使の往来を基本使命とする駅伝制の中継地であったのに
対し、瀬戸内海交通に於いて、都濃郡地方はまた要津の
地であった。対外的な朝鮮との海路通交上、当地方がそ
の要衝地点の一つであったことは、紀小鹿火の角国滞留
伝承からも十分覗えるところである。笠戸島と大華山半

島に抱かれた下松沖の海面、そしてその両方の湾入部は
地形が生み出した自然の良港であった。瀬戸内海の海水
の流は、山陽南岸沿いコースと四国沖コースが合流する
熊毛沖に、最も近いのがこの笠戸の浦であった。

四世紀代、下松地方の有力首長は、伝世した三角縁神
獸鏡を権威の象徴に倣って、自らの墳墓に副葬したもの
と思われる。それは生活立地となった切戸川・末武川下
流域の丘陵地からやや離れて、宮ノ洲の先端に造営（前
期古墳時代）されたのは、沖合を航行する舟上の人々に
向かって、己れの権勢を誇示しようとする意志を現した
のであろう。更には、新南陽の島嶼部に、竹島御家老屋
敷古墳（前期古墳時代・現東ソー（株）構内）や永源山横穴
墓（後期古墳時代）が築造されている。

さらに降って、保延三―四年（12世紀前半）、内海を
旅した蓮禪という一人の僧侶は、笠戸泊に着いて、つぎ
の七言律詩を詠じた『本朝無題詩 七』

鳴榔連日任輕飛

笠戸泊中徐晚輝

江岸嵐時松子落

野扉雨処豆花肥

五湖遁越范公去

八月指吳張翰帰

朝暮往来人不絶

難知賢士隱漁磯

これら周南・下松の鳥嶮部の潮流は、今なお変わることなく、今日では大型荷客船が着棧出来る徳山港（晴海埠頭）や下松港（第二埠頭）が往時を偲ばせる。

時代に沿って辿ると、律令制国家と馭制は、大化の改新の詔に初めて京師を修め、畿内国司・郡司・関塞・斥候・防人・馭馬・伝馬を置き、及び鈴契を造り、山河を定め、五畿七道が建設されたと伝わり往時が偲ばれる。

第二章 元寇の時代

律令政治の中興、藤原氏擡頭による摂関政治・貴族政治・院政を経て、驕る平家を檀の浦に追い、源頼朝が

鎌倉幕府を開き、政所役を朝廷に求め、大江広元（文章三家、藤原家・菅原家・大江家）に託したのも束の間、北条執権政治を揺るがした元寇（蒙古）襲来は二度に亘った。

が、文永十一年（1274）元軍襲来は、「東路軍」（モングル・高麗連合）と「江南軍」（旧南宋）に分かれ、対馬・杵岐を侵し、続いて肥前・筑前に上陸し、異国降状を迫る。

弘安四年（1281）七月、二度目の元軍襲来は、元に滅ぼされた南宗軍を主体とした「江南軍」であった。時に七月三十日。この夜半、九州北部一帯を激しい暴風雨が襲った。人々は、この嵐を「神風」と呼んだ言い伝えを、伴野朗著『元寇上』から部分抜粋・引用すると、この夜の台風の規模を測定したのは、九州大学教授・真鍋大覚。着目したのは東京の国立科学博物館にある樹齢八百年の屋久杉の標本。

この杉の半径は平均69 cm、中心部は大治五年（1130）、外皮部は昭和二十五年（1950）と推

定されている。その中心から12・64cmの位置に幅2・22cm亀裂を伴った斑点群が11個、輪状に並んでいる。年輪から推定して、これが弘安四年七月の台風によるものと考えられた。斑点群が年輪全周に沿って一様に分布していることから、この台風の中心は、屋久島の至近距離を通過したものと思われた。これまでに発生した台風が杉の成長に及ぼした年輪変化の数値を分析し、この時の最大瞬間風速を55・6と算定した。この風速だと中心は950 Hpaの超大型台風ということになる。

気象庁の観測記録によると、中心950 Hpaの超大型台風が九州の南方200 km海上に達した時、中心から北600 kmの対馬以南の海上は秒速15 mの東風が吹く。屋久島付近で中心950 Hpaならば300 km北の鷹島周辺は完全に台風圏内にはいり、瞬間風速は20 m内外の北東風ないし北風が吹き荒れていた筈である。そして、台風のコースが九州南の海上から九州西岸をかすめ、あるいは西の海上を北上した場合、常に大きな被害が出ているという経験則がある（台風の時間的關係については

『八幡愚童記』がある）。

このようなコースをとった台風は昭和十五年の第4027号台風（960 Hpaで九州西の海上を北上）、同二十九年のジュネス台風（第4909号は24時間九州西の海上に停滞した後、一気に東に走り去っている）がある。

後年、海底調査記録本が出版され、『水中考古学』から部分抜粋・引用すると、平成二十三年（2011）十一月、この鷹島海底から元寇の沈没船が発見された。調査が始まったのは平成十七年、琉球大学・池田栄史教授らによる調査チームは、船上から海底に向けての音波探査を実施し、詳細な海底地図を作成。その中で特に異常反応のあつた地点を十数か所に絞り込んで潜水調査を行った。現場は水深約20 mの海底。七百年間に堆積した泥の厚さは約1 mにもおよぶ。ダイバーそれぞれの潜水時間が一日二回、一日三十分程度と限りがある中、数10 cm先も見通せない視界の悪い海底では、プロのダイバー

でさえ簡単には発掘作業は進められない。

劣悪の環境のなかで、ポンプですこしずつ泥を吸い上げていく。やがて泥のなかから木材が姿を現した。目の前に世紀の発見と呼ぶにふさわしい光景が広がっていた。元寇船が現れたのである。元寇の船は絵巻物として残されているだけで、どんな形だったのか不明な点が多い。構造を残した元寇の船が見つかったのは、これが初めての特筆だった。

沈没船は、鷹島南岸鷹島の沖合 150 m、20×25 m の海庭面をおよそ 1 m 掘り下げた位置に静かに横たわっていた。縦・横約 10 m×15 m の調査区からは、船体の背骨ともいべき竜骨やその両側に沿うように外板材（幅 15×25 cm、厚さ 10 cm、長さ 1×6 m）が当時の姿のままに整然と残っており、隔壁やあばら骨にあたる肋材の痕跡が認められるなど、船体構造の核心部分に迫る資料が検出された。竜骨の先端部分は調査区外まで延びていると推定される。

竜骨の両側は、漆喰のような灰白色の塗料によって塗

り固められており、平行して船底から舷側を構成する外板が並んでいる。中華の文献によれば、中国では、すでに隋王朝の時代（589～618年）から桐油や石灰に麻布や竹などを刻んで混ぜたものを船の防水に用いており、今回の発見は、石灰が塗料としてのみならず水止にも利用されていたことを裏付けている。

竜骨や外板材の上には、多数の中国産陶磁器片や磚が散乱。これらに混じって硯、銅銭、球形土製品、携帯用砥石などが見つかっている。磚はかまどなどに用いられる耐火レンガの一種だが、300個を超える量が確認されていることからみると、ここではむしろ船の重心を安定させるためのバラストとして使われていたようだ。また携帯用の砥石は刀や鎌を研ぐ石で、元軍兵士が鷹島を目指してきた証でもある。

保存状態良好な二隻目。平成二十六年（2014）十月に、今度は二隻目の元寇の船が発見された。調査は九月十八日から長崎県松浦市教育委員会と琉球大学が合同で行っていったもので、後述する国史跡「鷹島神崎遺跡」

東約200m、深さ14mの海底の有望と判断された九ヶ所で潜水。海底を鉄の棒で突いて遺物の有無や形状。材質を確かめる作業を始め、この二隻目の沈没船を探り当てた。船体のうち船首部分から約10mが残っていることを確認、後方部分は堆積物に埋まっている状況にあった。調査はわずか五日間しか掘ることが出来なかったため、発掘されたのは一部である。

その後、二十七年の六月十一日から七月一日にかけて、改めて発掘調査した結果、長さ約12m、最大幅約3mの船体を確認するに至った。船体はほぼ南北方向を向いており、先が狭くなっていく南側が船首部分のようだ。復元した場合の船の大きさは約20m、甲板幅は約6.7mと推定され、1隻目よりは小型とみられる。船内は九枚の隔壁（厚さ約9cm）で仕切られており、甲板裏失してはいるものの、船体の下部構造がしっかりと残されているなど、保存状態はきわめて良好で元寇の実態解明につながると期待される。なお、船内や周辺から12〜13世紀の中国製とみられる白磁碗などの遺物約二十点

を確認。松浦市では次年度以降も引き続き調査を行う意向であるとのこと。

第三章 中世から近世の長門・周防

再び五畿七道に戻して、文永十一年（1274）対馬襲来の報は十七日を要し、弘安四年（1281）博多襲来の報は約七日であったのは、鎌倉幕府が遞送制度改善策を施した結果で、蒙古襲来は、山陽道の整備・改善にも寄与したものと考へられる。因みに、北朝（足利尊氏加担）・南朝と室町幕府は形骸化、世は乱れに乱れ、応永の乱で大内義弘（二十五代）は斃れ、武蔵国毛利之庄を領地とした毛利家の遠祖は大江広元。後に安芸国吉田村に移り、毛利家中興の祖と伝わる元就生誕の地。日子氏との戦いで、大内氏に与_くみした毛利元就は永祿一〇年（1567）二月九日、病氣治療にあたっていた曲直瀬道三は、元就から出雲国内見聞の褒_{ほう}貶_{へん}を腹藏なく注進するよう求められ、和漢の古典を引用、為政者としての治国の政道についての心得を九箇条にまとめた序文、「武

威天下無双、下民憐慈の文徳は未だ」を注進した。

大内義隆（三十一代）は、文治派（相良武任）を重用。

陶晴賢が反旗を翻し、義隆は大津郡・大寧寺で自刃、ここに大内氏は歴史の舞台から去る。石見国津和野の吉見正頼は陶晴賢の不臣を責め、毛利元就もこれに与みして陶晴賢を討ち、中国八ヶ国を平定。

西国切り取り令を発した織田信長は本能寺に斃れ、豊臣秀吉が跡を襲い、九州平定（島津氏討伐）を進め、慶長十九年（1614）、肥前名護屋下向の際も花岡に泊まっているが、秀吉が朝鮮征討軍の軍用道路として沿線諸大名に建設させた後、秀吉は外征の師を起こし、大坂から肥前名護屋城（現佐賀県）に至る水陸交通の充実を図り、沿道の諸將に命じ、各領内の道路橋梁を修築せしめ、宿駅津泊の継飛脚継船及び乗馬等諸設備を整えせしめた。なお、海路について小早川に命じた。なお、食糧補給や兵士休養の地であったことから、阿月に神明祭が今に伝わり、そして、室津半島を廻った所・上ノ関でも

上ノ関の神明祭が行われている。

一方、陸路について『切山の歩みと切山八幡宮』によると、秀吉は外征の途上、切山八幡宮に馬具を奉納したとの伝承があり、この時は、海老坂（現・周南市呼坂）から、周南市八代に向かう道の途中から、切山八幡宮前を経て、周防久保駅（岩徳線）前に至る道を指していると思える。

なお、徳川幕府の歴代將軍交代への表敬使節である朝鮮通信使の接遇指示・報告の古文書も各地に残り、嵐で笠戸島本浦に避難したことが記された古文書も、今に伝わる。

因みに、朝鮮通信使は徳川將軍交替の都度、朝鮮から四百名、日本側警護は八百名で、総勢千二百名が江戸と下関間を行き来したとの記録が今に伝わる（全十二回）。また、西国大名の参勤交替往還道は、現・国道2号線（可能な限り直線的に施工され、随所に旧往還道も現存する）と交差しながら、今日でも利用されている。

関ヶ原から大坂冬の陣と夏の陣で、西軍の総大将に担がれた毛利輝元（秀吉は、西国の儀任せ置かるの由候）は、防長二州に押し込まれた際、山口・防府・萩の三案を申し出たが、徳川幕府の命によって、遍境の地・萩を指定され、萩の指月山に築城した。

実は、萩は笠山噴火口跡が示すとおり火山地帯。河川扇状地の沿岸部に広がる豊富な安山岩を用いて城郭や城下町の屋敷や、城下町の両側にも側溝が整然と施工され、往時の風景（殆どの家屋は内装のみ修復）が今も伝わる。

一方、海底に広がる溶岩は魚貝類を育み、豊かな海産物が藩財政を潤したとも伝わる。

第四章 幕末の長州

長州藩の歴史を動かした男たちの筆頭は、なんともいつでも吉田松陰。その生涯で二十一回の猛を発しようとして、自ら二十一回猛士と称し、一回目の「猛（密航）」に斃れられた。

松下村塾の双壁と称された久坂玄瑞と高杉晋作。高杉晋作は、師が「至純至高の思想を狂と定義し、狂でなければ国は救えない」としたことを伝承するために「素狂」と号した。文久元年（1861）幕府の遣清使節団で上海を視察、列強との彼我の差を知り、帰国後は軍備を進め、後に奇兵隊を創設。四境戦争・小倉戦指揮半ばに、病に斃れた。

村田清風は、天保の改革（天保十三年、諸宰判に命じて、村毎の『風土注進案』を提出させた）、藩財政の再建と、明倫館（後年、明倫小学校から萩・明倫学舎へ）重建や羽賀台大操練（兵制改革・女台場が今に伝わる）を行った。周布政之助は、兵制改革と天保藩政改革の途上に自刃して果てた。

幕末の長州藩を動かした要人の長井雅樂（長井家遠祖は大江広元）。眼光炯々、しかも人品は立派な大男。一方、世に「防長二国では智弁第一」と称された秀才。敬親公の信頼厚く、藩主名代として「航海遠略策」でもって朝幕間を周旋し、朝廷・幕府から厚く信頼・期待されたが、

周旋成就寸前に時代のうねりに飲み込まれ、無念の自刃に追い込まれた。

吉田稔磨は、九歳で「大学」を学び「神童」と呼ばれた秀才。松陰からは特別授業を受けて将来を囑望され、松陰門下の三秀、四天王と呼ばれるも、しかし後年、恩師と決別する。そして旗本・妻木家に名を変えて住み込んで幕府の情報収集に当たり、勤王の志士として活躍する傍ら、屠勇取立の献策をして維新団などの結成に尽力。将来を囑望されつつ池田屋の変で凶刃に斃れた。

吉川経幹は、十二代岩国藩主。聡明で学問好き若殿様。毛利・吉川両家間は江戸初期以来不仲であったが、敬親公が聡明な経幹を厚遇し、子息を養子にして縁戚を結び、岩国藩昇格を約束。以後、第一次、第二次幕長戦争では経幹及び岩国兵の大活躍により幕軍を撃退した。維新後、敬親公は経幹の死（慶応三年）を秘し、初代岩国藩主経幹を朝廷に上申、藩昇格が承認（明治元年）され、関ヶ原の役以降の毛利・吉川両家間の蟠りは雲散霧消した。

文久二年（1862）、「航海遠略策」から「破約攘

夷」へと藩論は一転。文久三年（1863）、長州藩主毛利敬親が山口移鎮を進め、元治元年（1864）、山口政庁（現山口県庁）には、西洋式城郭の名残りが今に残る。その間、文久三年（1863）、英国に五人派遣（伊藤博文・井上馨・井上勝・遠藤謹助・山尾庸三）。翌元治元年、現地新聞に「関門海峡で長州藩が外国船砲撃（五月十日）」を見て、伊藤博文と井上馨は直ぐに帰国の途につく。四ヶ国連合艦隊による報復攻撃の終戦処理（高杉晋作に伊藤博文は随伴）。

なお、高杉晋作と伊藤博文は、萩から山口へ、山口から富海へは夜陰に紛れ、富海港から早舟で大坂へ行き来していたとの記録が今に伝わる。時代を展開させようとする二人、当然、人目を避けていたものと考えられる。

元治元年（1864）七月の禁門（蛤御門）の変では、三家老（益田右衛門介・福原越後・国司信濃）伏死・謝罪。萩本藩の政争と軌を一にした徳山藩では、「殉難七士（本城清・江村彦之進・浅見安之丞・児玉次郎彦・信田作太夫・河田佳藏・井上唯一）」前途有意な人材を

失う。

慶応元年（1865）四月、第二次幕長戦争（四境戦争）前夜、幕府・小笠原耆岐守が広島に下向、長州藩主名代・井原主計が交渉。その際、宍戸備後助が、「長防臣民合議書」を起草、三十六万部印刷（正しくは数千部!?）・山口県立図書館に印刷蔵書）配布。幕府・永井主水正は、今の幕府に、これだけの書面を起草できる人材はいない……、そして、四境戦争に突入。

『防長歴史用語辞典』から参勤交替について引用すると、信長が考え、秀吉も封権家臣の城下町集住策を踏襲、徳川幕府は、大名の江戸参勤と妻子の江戸居住を制度化。長州藩毛利氏は初代藩主・秀就が慶長六年（1601）以来十年間江戸に在府、その後一年おきに参勤、寛永十二年（1635）の改正武家諸法度による参勤交替の制度化以来これが常例となった。一年参勤在府、一年在国するもので、長州の江戸の邸宅は桜田門外にあるものを上屋敷とし、麻布竜土町にあるものを下屋敷、その他

に二・三の別邸（そのひとつは、現品川プリンスホテルの地）があった。参勤の発途はおおむね三四月、帰国は五六月ごろで、一門老臣以下・千人に近い諸臣を従え萩城を出発し、明木・佐々並・山口を経て三田尻で山陽道に出て、陸路宿駅の泊りを重ねて江戸に至る間、往復ともに約三十日を要した。海路の場合は三田尻から御座船及び供船に乗り、瀬戸内海（室津）を経て大坂。なお、海の時化で一度に二十名近い藩士を失ってからは、陸路（山陽道）で大坂。川船で淀川を溯航し伏見から陸路（東海道）を進んだ。

藩主の参勤には加判の一門老臣が随従、藩地には国元留守居家老を置き、藩主が帰国の時は随従の一門家老が江戸邸に留守居家老として残るのが例であった。この外に当役を置いて藩主の参勤帰国に随従、常時君側の補佐の任に当って權威を有し、藩地の政務を総理する当職役に対した。参勤の在府一ケ年、在国の年でも江戸邸には留守居家老以下在番の諸臣が多いので、江戸の経費は藩費の大半を食い、毎年の貢租米の大半は大坂売米に回し

てこの経費に充当され藩財政を圧迫。なお、藩主は、発途・帰国共に菊屋で旅装を整え、旅装を解いたが、ペリー來航以來、沿岸警備を命じられ、参勤交代制廃止された。

後藤敦史「洋上はるか彼方のニッポン」講演資料によると、ペリー來航は、米国西海岸と中国（清国）を結ぶ航路上の日本列島を石炭補給地とするためであったが、米墨（メキシコ）戦争が勃発したため、内政を優先せざるを得なくなり、ペリー再航予定は伸びた。一方、日本国内は臨界点に達した。そこで、徳川慶喜よしのぶは大政奉還、京都を離れ大坂城、更には幕府軍艦で江戸へ、薩摩藩は藩主の了解の元に尊皇攘夷を掲げ、長州藩は正義派と俗論派による政乱はあったが、高杉晋作が功山寺で挙兵（奇兵隊）の後、大田絵堂で奇兵隊と長州藩とが対峙、家老以下藩兵長州藩が敗退。更には佐賀藩（肥前）と土佐藩が続き、徳川二百六十年余の幕は閉じた。

一方、長州藩の正義派と俗論派による政乱の動きは、徳山藩にも伝わり、俗論派が一時期実権を握り、正義派（改革派）勤皇の志士として活躍しながら、幕府に恭順

した俗論派（保守派）による処刑や暗殺など尊い命を失った（前述）。徳山藩士、本城清、江村彦之進、浅見安之丞、児玉次郎彦、河田佳藏、信田作太夫、井上唯一、いわゆる「徳山七士」殉難同様の争いがあったが、これは、当時の家老が反対する等々を次々に捕え個別に幽閉・殺害したもので、後世、殉難七士として再葬され、顕彰碑建立と供養祭等が行われている。

ここで、第二次長州征討の四境戦争の口伝の記録を引用させていただと・・・

慶応二年（1866）六月八日午前四時頃・四国松山藩の軍艦三隻と和船十五隻が周防大島の安下庄側から砲撃の後、大島に上陸して民家を焼き、民を殺戮。翌未明に高杉晋作が、丙寅丸（おてんとう丸）で砲撃した後、長州軍を大島に上陸させ、消火活動等の状況調べ。

十六日、源明峠で決戦、長州軍は山上から松山を打ち下し、勝利。

十七日、久賀に向かい、松山兵は家々に放火しながら退却、遂に軍艦に乗って退却した。

十九日、久賀沖に敵軍艦三隻、和船十五隻で松山兵が上陸。放火・略奪、長州軍を見て敗走。

二十一日、世良修蔵は松山兵十四人を斬殺。非戦闘員十一名に路銀一両を与え、船を仕立て帰国させた。

松山藩の船は一端引き帰し、再度、船で小瀬川の東側から、千五百人が上陸し砲撃を仕掛けると共に、民家に火を放ち、六百九十余軒の半分は焼かれたが、迎え撃つ徳山藩及び山崎隊・他が小瀬川を挟んで砲撃を加え、渡川して松山藩兵を追払った。

長州軍 六月十四日、小瀬村と中津原

毛利幾之進総督の遊撃隊ら八百名

瀬田村×大竹村

吉川監物（経幹）指揮下の岩国兵千六百名と諸隊兵幕府軍は、大竹口・彦根・榊原藩兵（甲冑陣羽織・狙撃され総崩れ）

中津原口・越後高田藩兵（甲冑陣羽織・狙撃され

総崩れ）

吉川監物は籠城覚悟（予想外の大勝利）

幕府援軍（幕府陸軍兵＋大垣＋紀州＋新宮藩兵五千名）（新兵器のミニエー銃を使用して膠着状態）

幕府軍の内部崩壊（幕閣松平宗秀が独断で人質の宍戸・小田村釈放・総督徳川茂承が激怒・辞表

六月十三日、休戦交渉（宮島の大願寺）

七月（将軍家茂二十歳の死去による内部崩壊）

九月二日、監物が仲介し和平交渉（勝海舟×廣澤眞臣・井上馨）

十二月二十九日、毛利敬親と英国海軍キング提督、

三田尻で会見

三十日、軍艦で食事 写真 艦内で撮影

大島口の勝利に、藩主毛利敬親は殊の外喜び、兵

士一同へ枇杷を贈り、労をねぎらった。

三田尻口は、双方、軍艦からの砲撃が主体で松山藩は逃げ帰った。

小倉口は、高杉晋作が舟で上陸して城下に火を放ち攻め

たが、城主・以下、皆逃げて小倉城は空っぽであった。浜田口は、大村益次郎が指揮したが、浜田藩兵は蜘蛛の子を散らすが如く雲隠れして不戦勝。

第五章 明治時代の交通（下松を中心に）

『都濃郡河内村明治二十年地誌（第貳冊の百三十九頁）』によると、往還道（往時は馬や駕籠）は、窪市（現久保市）の由加社前（切戸川を渡る箇所）の橋と川は直交しているが、車社会（三輪車と四輪貨物車）を迎へ、道路直進（橋は川に斜交）。「防長交通60年史」によると、昭和三年（1928）には、下松駅と久保駅と花岡駅間に路線バス運行が始まった。

再び、『都濃郡河内村明治二十年地誌（第貳冊の百四十三頁）』には、埴市（郡境）から山田村・生野屋村（村境）間に四十三本の往還松が植えてあった場所についての調査・記録がある。

なお、後年（昭和三十七年（1962））、国道2号線敷設時に全て伐採された。そして、山田村と生野屋村境の

東側に塩売峠（枝折峠とも）、峠の所には、花岡八幡宮石段向かって右側の亀石と大きな石碑があり、この石を採掘・運搬した割石（花岡八幡宮の亀石の採石場跡）から、参勤交替時の駕籠建場跡を過ぎ、生野屋に至る所で現国道2号線に斜交（現山陽新幹線高架付近）して、花岡八幡宮に至る間が一日を要したとも伝わる。

時代が前後するが、和銅二年（709）鎮座（社伝）の花岡八幡宮本殿（屋根部）石段側、近衛忠熙公（明治時代1808～1898 反幕で知られる公家）「永受嘉福翠山書」の篇額、

以前（下松市中央公民館・ふるさと広場ボランティア当時）、花岡八幡宮に尋ねた所、当時から掛けてあるとの回答でした。

時代は前後するが、境内に、藤原鎌足の建立と伝わる多宝塔（国指定重要文化財・関伽井坊所有）があり、都濃宰判当時、「修学院御茶屋絵図」（下松市指定有形民俗文化財）にも描かれている御茶屋（藩の公館）と花岡勘場（宰判の役所）や高札場（幕府や藩府のふれがき触書・

おきてがき掟書の揭示所)の位置関係が今に伝わる。

あとがきにかえて

「周南は長門・周防歴史の十字路口」と題し、改めて、歴史上の出来事を列記してみると、長門・周防の歴史に周南地区がわりやり引き出された観すら窺える。

そうした意味に於いて、さらなる郷土史研究・古事への銚や鎌を入れ、さらに深耕する余地や事績が随所にあるのでは!?との思いを馳せながら本稿の筆を置く。

徳山から疎開・転入した烏帽子岳(412m)裾野の里にて記す。

【主な参考文献】

- 『下松市史 通史編』下松市史編纂委員会
- 『元寇 上』伴野朗著
- 『水中考古学』井上たかひこ著
- 『都濃郡河内村明治二十年地誌』河村蒸一郎著
- 『道路の日本史』、『海瀬舟行図』
- 『本朝無題詩七』、『八幡愚童記』
- 『切山の歩みと切山八幡宮』
- 『防長歴史用語辞典』

- 『洋上はるか彼方のニッポン』後藤敦史氏講演会資料
- 『四境の役と周防大島』宮本常一著
- 『防長交通60年史』

【その他の参考文献・資料】

- 徳山市史編纂委員会『徳山市史 上・下』
- 徳山市史編纂委員会『徳山市史史料 中』
- 殉難150年・徳山七士慰霊祭祀記念「七人の志士」
- 近藤清石著『大内氏實録』三坂圭治校訂
- 岩崎俊彦著『大内氏壁書を読む』大内文化探訪会
- 岸浩編著『毛利氏八箇御時代分限帳』
- 山口県文書館編『萩藩閩閩録 第一〜四巻・別巻・遺漏』
- 時山彌八著『もりのしげり』
- 岸田裕之著『毛利元就』ミネルヴァ書房
- 光成準治著『毛利輝元』ミネルヴァ書房
- 月刊まるごと周南2013年3月号「殉難七士」
- 『殉難百五〇年・徳山七士慰霊祭祀記念冊子』
- 徳山地方郷土研究会誌37号「弘鴻「種蒔の菜」に寄せて」
- 大内文化探訪会・公開講座
- 信友明著『来卷萬覚え書』
- 信友明著『来卷郷土史誌』
- 『国指定史跡三田尻御茶屋(藩公館・英雲荘)』
- 長門蔵版局「長防臣民合議書」山口県立図書館蔵
- 中公新書編集部編『日本史の論点』中公新書
- 岡本隆司著『日本と中国の2000年史』歴史街道2020年5月号
- 児玉幸多編『日本史年表・地図』吉川弘文館

以上